Water

LiN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｗａｔｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ７６９０Ｚ

【作者名】
ＬｉＮ

【あらすじ】
キャンプ、水遊び、友達。

小学校五年生の時。市で小学生を対象に募集されたキャンプに二泊三日で行った。
隣の県の山村。主に川遊びがメインとなるもので、テントで寝泊まりするのだ。

出発する一週間ぐらい前に市の施設でメンバーの顔合わせと簡単なレクリエーションがあったのだが、わたしは地域のミニバスケのチームに入っていて、そちらで練習試合があって行けなかった。

そういうわけで、キャンプに行く他の小学生、特に同じ班となる子どもたちや、引率のスタッフとはじめて顔をあわせたのは出発当日。バスに乗り込んでからだった。

その女の子はわたしが荷物を棚に押し込んだり、シートベルトをいじっている間にいつのまにか隣の席に座っていた。わたしと同じように細い体と、ぱちっとした目、広いおでこ、ポニーテール。パステルカラーのTシャツと、ジーパンがよく似合う、活発そうな女子だった。わたしはクラスの女子とも何を話していいか普段から分からなくて、その時も同じで、ずっと黙っていた。彼女はチラチラとわたしの方を見ているようだった。

少しすると、班の中で自己紹介をすることになった。わたしは緊張した。人前で話したりすることは苦手だった。他の子や、スタッフのお兄さんが何を言っているかまったく耳に入ってこなかったけど、隣に座った女の子がわたしより一つ下の四年生であること。安部という名字であること、ベアちゃんというあだなで呼んでほしいと言ったことだけはなんとか頭に入った。わたしの番が回ってきて、わ

たしは名前と学年とかを喋った。自分の顔が真っ赤になっているのが分かった。やっと喋り終えたと思ったら、スタッフのお兄さんが「君はこの班で一番年上だから班長をやってもらう。」と言った。「班長としてもう一言何か喋ってほしい。」とも。

そこでわたしは泣いてしまった。

わたしは泣き虫だった。気が弱くて、普段もちょっとのことですぐ泣いてしまうのだ。そのことで学校でからかわれてもいた。親がわたしをキャンプに送りこんだのも、そういう性格がなんとかなれば・・・という考えがあったのだと思う。特に小学校5年の夏、その時点でわたしは元の性格以上に気弱になって、自信を無くしていた。

前の年の夏に行ったミニバスケチームのキャンプで環境の変化や緊張から体を壊し、移動中にうんちを漏らしてしまったこと。

その後、治ったと思っていたのにまたおねしょをするようになってしまったこと。

五年生になってから授業中に我慢できずおしっこを漏らしてしまったこと。それでクラスメートにからかわれていること。

お漏らしをしてしまったことの後悔。またお漏らしをしてしまうのではないかという不安がいつもつきまとっていた。

ベアちゃんがしゃくりあげるわたしの頭をなでてなぐさめてくれた。それがわたしにはさらに恥ずかしくて、もっと泣いてしまったけれど、ベアちゃんはその後わたしにいろいろ話しかけてくれて、気がつくとわたしはベアちゃんや班のみんなと会話を楽しんでいた。

午後に現地について軽くお昼を食べ、テントを張って、みんなで歌を歌ったりゲームをしたりした。ベアちゃんとわたしはその間ずっと一緒にいた。学校や習いごとの様子を二人でいろいろ話した。

夜ごはんはカレー。火を起こして、ごはんは飯盒で炊いた。ベアちゃんは火が怖いらしく、わたしが傍を離れることを許さなかった。スタッフのお兄さんが「お前ら初日から仲いいなあ」と言った。わたしは自分の顔が真っ赤になるのがわかった。ベアちゃんもちょっと照れていたけど、嬉しそうでもあった。

テントは男子用と女子用に分かれていて、わたしはベアちゃんといっしょに寝た。慣れない寝袋とテントでなかなか寝付けなかった。

次の日の朝、わたしはおねしょをしてしまっていた。パンツも寝袋もぐちゃぐちゃに濡れていた。なんで・・・どうして・・・。悔しくて情けない気持ちを抑えきれず、涙ぐんでいるわたしをテントに来たスタッフのお兄さんはなぐさめてくれて、後始末をしてくれた。けれどテントから出た時に、低学年の男子にテントの中、私のオネショの跡を見られてしまって、「ねーちゃんがおねしょした！」とばらされてしまった。班には他に三年生の双子の男の子がいて、「ほんとに？」「えー」とわたしの顔を覗き込んだ。

それでまた、わたしは泣いてしまった。
ベアちゃんが、わたしが泣きやむまでなぐさめてくれた。

二日目の午前中はわたしが一番楽しみにしていたカヌーだったけれど、おねしょをしたせいで気分は沈んだままだった。でも、水着に着替えて上にはライフベストを着て、操縦の説明を聞いて、いよいよ実際に川べりからカヌーに乗る時分には、わくわくした気持ちが戻ってきた。

わたしはわりとすぐにカヌーを動かせるようになって夢中で遊んでいた。すると「ウワーン。エーン。」と、赤ちゃんみたいな泣き声が聞こえてきた。ベアちゃんだった。ベアちゃんは相当に恐がって

いて、わんわん泣いていた。わたしはカヌーをなんとかベアちゃんのそばまで近づけると、大丈夫大丈夫となだめ、操作の仕方を少しずつ教えた。ベアちゃんは泣きながらも真剣にわたしの言うことを聞いて、なんとか操作ができるとこまでいった。

カヌーが終わって川べりにあがり、お昼御飯を食べてキャンプ地に戻る時、ベアちゃんはわたしの前で恥ずかしそうにしていたけど、ふいに「ありがとね・・・」と言って、わたしがコクンと首を縦に振るとニコっと笑ってわたしの手を握った。そして小さな声で「怖くてカヌーの中でちょっとだけおしっこちびっちゃった。」と言った。わたしは今朝の自分のオネショを思い出して恥ずかしくなった。ドキドキしながらベアちゃんと手を繋いでキャンプ場まで戻った。

午後はキャンプ場近くの川で水遊びをした。午前中に続いて水着のままだ。ベアちゃんは思いっきりはしゃぎまわっていた。双子とつるんで他の男子の水着を無理やり脱がせたり、魚を手づかみしようと夢中になって水の中を走り回っていた。

夕方、水遊びが終わりになってテントで着替えることになった。わたしが服を脱ごうか迷っていると、ベアちゃんはどんどん服を脱いで、着替え出してしまった。わたしはあわててベアちゃんに背をむけて着替えた。

夜、キャンプファイアーをして、ベアちゃんと踊って、歌った。星を見て、どちらからともなく、手を握った。

三日目最終日、朝、わたしはおねしょをしていなくて、ほっとした。ベアちゃんがニヤニヤしながら「今日はおねしょしなかった？」とからかってきた。朝ごはんの後、テントをたたんで帰る準備をしたが、出発までまだ時間があった。水着に着替えないが、行きたい人

は近くの川辺で遊んできていいということだった。わたしらの班はみんな行くことにした。

川辺ではズボンをはいているとどうしても濡れてしまい思い切り遊べない。業を煮やした男子達がズボンを脱いでパンツ一枚になって川に入っていった。ベアちゃんはわたしの隣に座り込んで「どうしよっか。」「私達も川入りたいね。」「男子はいいね。」とボソボソ言っていたが、ふいに立ち上がってジーンズを脱ぎ、パンツ一枚になってしまった。「行こうよ。」ベアちゃんが言った。顔は少し赤くなっていたけれど満面の笑みだった。わたしも立ち上がるとズボンを脱いだ。最初は恥ずかしかったけれど、みんなと遊んでいるうちに慣れてきて、思い切り遊んだ。

はしゃぎすぎて班の全員が下着を川の水でびちょびちょにしてしまい、後で怒られた。

帰りのバスの中で、ベアちゃんとわたしはずっと手を握っていた。あまりしゃべらなかったけど、わたしらの間にはその時には言葉が必要なかったのだ。

バスが街に帰りつき、解散となる時、ベアちゃんもわたしも泣きそうだったけれど、なんとか二人とも我慢した。

最後にベアちゃんが手を差し出して、わたしはその手をぎゅっと握った。

それがわたしの大切な三日。あの日の夏休み。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7690z/

Water

2011年12月25日01時46分発行